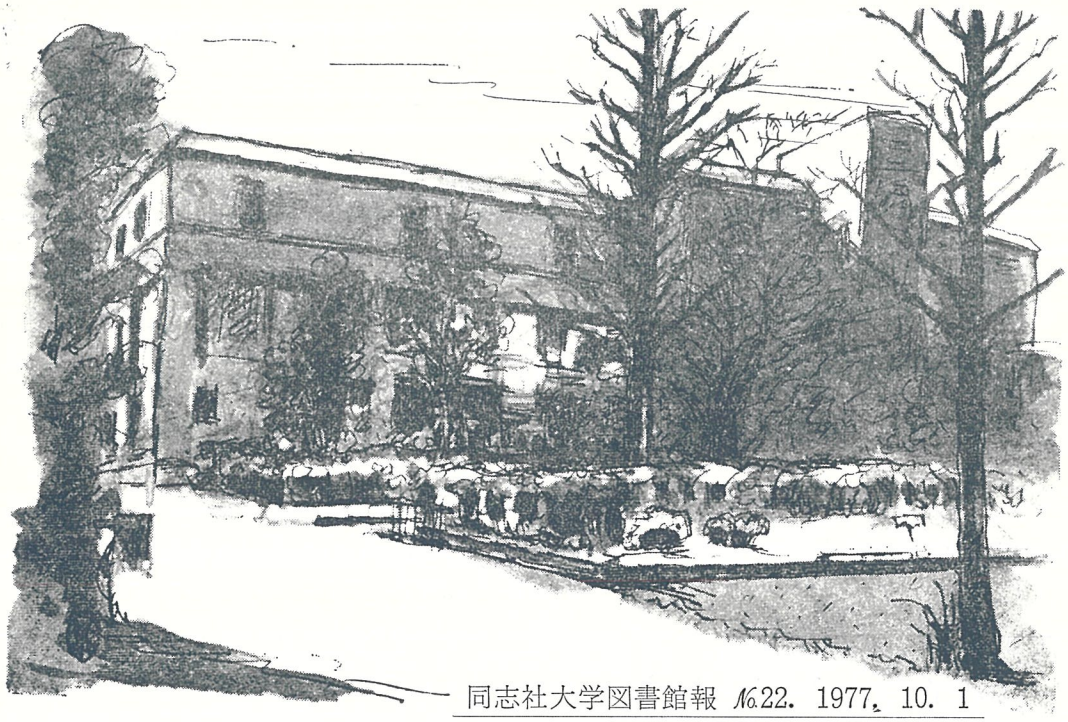
びぶりおてか



同志社大学図書館報 №22. 1977. 10. 1

現代焚書考

経済学部長 榊原胖夫

本というのはいつのまにかふえる。ときどき思いきって処分してしまおうとするのだが，いざとなるとどの本にも多少の愛着があってなかなか捨てがたい。だからといってたいていの本は古本屋にもっていっても買ってくれないし，ちり紙交換にだしてもひきとってくれない。

本ほどとりあつかいにくいものは少ない。重くてかさばるし，持ち運びに不便である。置いておくとすぐほこりをかぶる。湿気があるとかびがはえるし，虫もつく。住宅難のおりからスペースをとるし，やむをえず横につんでおくと必要なときに見つからない。やがては重くなりすぎて根太までぬけ，家がかたむくことさえある。いったいどうしたものだろうか。そこで考えた。現代こそ焚書が必要なのであるまいかと。

それにはまず書物についての考えを根本的に改めなければならない。本は消耗品であると心にかたくきめてしまうのである。そうすれば一度読んで，読みかえすことがあるかどうかわからない本まで残しておく必要はなくなる。貴重なスペースは節約される。また読みたくなることがあれば，もう一度買えばよい。

第二に，たいていの本は書いた本人にとって意外に価値のないものである。どれほど多くの本が書かれ，ほとんど読まれることもなく忘れられていったことか。本を読んで著者にしか価値がないと判断し

目　次

現代焚書考（榊原胖夫）……1
文字とよみのあいだ（玉村文郎）……2
最近購入の N.U.C. Pre-1956 Imprints……3
最近の図書館利用状況……4
文献探索(20)　人名関係資料(4)……6
「実例中心」資料のさがし方(12)……10
図書館実習を終えて……12
同志社大学図書館の歴史(13)……13
ピックアップ“百一新論”について…14

たときは速かに捨てなければならない。

第三に古くなった本は，それを読んで，そこから学んだことが少なからずあったとしても，捨てるべきである。学んだことは大切であるが，学んでしまったものはもう必要がない。自分がそれから学んだからといって，残しておいて息子に読まそうなんて思うのは時代錯誤もはなはだしい。息子は親爺が読んだような本は絶対に読まないし，読むとすれば新しく買って読むにちがいない。

第四に大学内に図書の無料交換所を常設するべきである。いらなくなった本はそこに置いて読みたい人に自由にもっていってもらう。数週間たっても持っていく人がないばあいには，書物は大学に設置された焼却炉でつぎつぎにもやされる。本は家庭の焼却炉では処分しにくい。試験がすんだあとでどれほど多くの教科書類がもやされるか見物であろう。

第五に図書館では利用度の多い何万冊かの本をのぞいて，すべてマイクロ・フィルムで保存をはかることにし，書物を燃やしてしまうことにしょう。そうすれば現在の書庫のサイズでも十分に間にあうことになろう。

日本で本や雑誌が年にどれほど出版されているか正確には知らないが，日本人のすべてが何もしないで夜もねずに24時間ずつ本を読んだとしても読みきれないほど出版されていることは確かである。一方娯楽が多くなった今日では読書にたいする需要は低下傾向をつづけている。スペースと時間のねうちの上昇にくらべると，本のねうちは上昇していない。書物について，もっと合理的で経済学的な判断をくだせるような思想の転換が必要なのではなかろうか。

文字とよみのあいだ

—目録作成と検索にふれて—

文学部助教授　玉　村　文　郎

台風7号が接近したとき，テレビの予報の多くがナナゴウと言っているなかで，あるチャンネルだけがシチゴウと言っていて，印象に残った。テレビやラジオでは，音声による伝達が主になるから，当然ナナゴウというのが一般的であろう。しかし「7号」自体はもともと漢語ふうにシチゴウとよまれてもいいはずである。

こんなことを書き出したのは，図書館には図書検索カードがあって，書名目録にしろ著者名目録にしろ，五十音順かアルファベット順に配列されているが，その書名ないしは著者名が多く漢字表記であるために，よみの確定に大きな問題があることを言いたいからである。著者名は，日本ではたいてい漢字ばかりで書かれていて，音よみ（佐藤・坂東など）に比して，問題の多い訓よみのものが圧倒的に多い。人名は，一般に定着した和訓だけでなく，名乗りや極端なあて字までも含んでいるので，始末がわるい。茨木がイバラキかイバラギかは当人に確かめなければならない（ちなみに大阪府内の市名は前者である）。近年，著者名にルビをふったり，仮名表示をつけ加えたりするものがふえているので，分類係やカード作成者の負担も少し軽くなってきているとおもうが，こういう著者名の音仮名表示は，まだまだ少数派である。イバラキかイバラギかは，実は五十音順配列の目録では，キという要素文字に濁音符がついているかどうかの違いなので，互いに接近した個所に存在し，一方を求めて，期せずして他方に至ることも多く，手間もとらせることにはならない。しかし，アルファベット順の目録なら，かなり離れた個所を探して，徒労に終わることになるだろう。それでも，イバラ－キ／ギの場合は，第3音節までが共通であるから，問題は小さい。伊地知は，イジチだとばかりおもっていて，イチシと読む例（『微積分の話』の著者伊地知武士氏）に遭遇して驚き，固定観念にとらわれていたことを自省したことがあった。こういう場合には，五十音順目録によっても，第2音節でジとチに分かれてしまうので，検索者はずいぶん時間をかけて探しまわることになるはずである。

竜安寺はリュウアンジかリョウアンジか，相国寺はソウコクジかショウコクジか，三色すみれはサンショクかサンシキか，初恋はハツコイかハツゴイか，百人一首はヒャクニンイッシュかヒャクニンシュか，冷泉はレイセンかレイゼンかレイゼイか。これらの相違は，それぞれ事情を異にするものであるが，書名・著者名のよみを決定するには，方言・時代・慣用・故実などの多方面にわたる知識を要求されるであろう。ハツゴイはわれわれの耳には奇異にひび

くが，明治の前半まではそう言っていたものである。西日本ではムツカシイというのを，東日本でムズカシイといっているのは，方言的な差である。

さて，カード作成者がよみを確定しえたとしょう。そうすれば，利用者側には問題がないかというと，そうではない。大学生も含めて，一般の日本人は，発音そのものをさして鋭くは意識せず，よみについてもあいまいな認識しかもっていないことが多い。小説『雪国』の書き出しの第1語「国境」を，みんなはどう読んでいるだろうか。

われわれの祖先は，表音的な文字を「仮名」と称し，表意・表語の漢字を「真名（まな）」と呼んだ。そこにある漢字正字意識が，戦後いくぶん弱まってきたとはおもうが，なお根づよく残っていて，文字をもっぱら音を示すものと考える欧米人とは違った態度で，われわれは文字を使い，文字を理解しているとおもわれる。文字が，あるいは字形として，あるいは語そのものとして先ず意識され，音とはやや距離のある存在になっているが，日本における表記慣習の特種な位相である。

図書目録の作成にも，図書検索にも，直接解決策を示すことは，わたしにはできない。ここに提出した問題は，早急な解決をこばむ問題である。根本的には，国語を深く正しく認識し，新しくはぐくみ育てていく力とわかちがたく結びついているのである。

図書館から

"最近購入の National Union Catalog Pre-1956 Imprints について"

最近本館が購入した The National Union Catalog, Pre-1956 Imprints について紹介しましょう。

これは，アメリカ議会図書館とアメリカ図書館協会が協同で編さんした総合目録で，アメリカはもちろん，カナダの重要な図書館が所蔵する図書の目録も収められています。総数約3600の機関（Location markによる）が所蔵する資料の実に膨大な冊子体目録で，総数約600冊の予定で現在継続刊行中です。

このうち今回納入されたのは第1巻（Symbols: ＊などの符号）—第509巻（Runge, Emil）までで，ひきつづき納入される予定です。なお，第1巻—第509巻のうち，Bible の項目に該当する第53巻—第56巻は未刊です。まだ全巻揃っていませんが，判型の大きい（高さ36cm）この目録が書架上に排架されているところは壮観で，この編さんのために注がれたであろう努力を考えると人間とは素晴らしいものだと思います。

ここで，この目録と関連のあるアメリカ議会図書館（L.C.）の目録についてふれます。

L.C.は，その所蔵する図書の冊子目録を次の期間で区切って刊行しています。

①	1898年8月	—	1942年7月	⑤	1953年	—	1957年
②	1942年8月	—	1947年12月	⑥	1958年	—	1962年
③	1948年	—	1952年	⑦	1963年	—	1967年
④	1952年	—	1955年 Imprints.（筆者未見）	⑧	1968年	—	1972年

これらのうち，①—③は L.C. の蔵書目録ですが，⑤以降は L.C. だけではなく，他の図書館の蔵書目録も加え全国的な総合目録（National Union Catalog）となっています。なお，この冊子目録は，毎年，月刊，季刊，年刊版を刊行し，五年ごとに累積版を出すという形式をふんでいます。以上が L.C. 冊子目録（N.U.C.）の概略ですが，次に N.U.C. Pre-1956 Imprints と在来の N.U.C. のつながりについてのべましょう。先述の L.C. 冊子目録の一覧表を見ると，どうも区切りがよくないと思えるのですが，実は⑥の1958年—1963年の総合目録に1956年以後刊行の著作の目録を再度収録して，収録範囲に間隙の出来ないように配慮しているのです。ですから，本当はこの1958年—1962年を1956年—1962年と読めばよいわけです。このようなことで，N.U.C. Pre-1956 Imprints は，①—⑤，すなわち，1898年—1957年までの冊子目録にとってかわることが出来ます。ただ注意が必要なのは，③の1948年—1952年の第24巻と⑤の1953年—1957年の第27，28巻で，これらの巻に収録されている映画，フィルムストリップ，レコードの L.C. 目録は，N.U.C. Pre-1956 Imprints には収録されていないということです。その他，第200巻は，表紙の色を変えて資料所蔵館の略号一覧を併載しています。しかし，主要な資料所蔵館の略号は各巻の表・裏表紙の見返に記載してあります。この膨大な冊子目録を——ルールを尊重することはいうまでもないことですが——せいぜい必要資料の発見やその利用に役立たせて下さい。

最近の図書館利用状況

—1976年度　利用統計を中心に—

図書館の利用は，ここ数年来種々の面にわたり，漸増の傾向を見せ喜ばしい現象であります。同時にこのことは，利用者の図書館に対する期待の大きさを示していると云えましょう。その期待に応じるために，全館員一丸となって利用者へのサービス向上に熱心に取り組んでおりますが，十全に行き届かない点もあり，館員にとっては悩みでもあります。

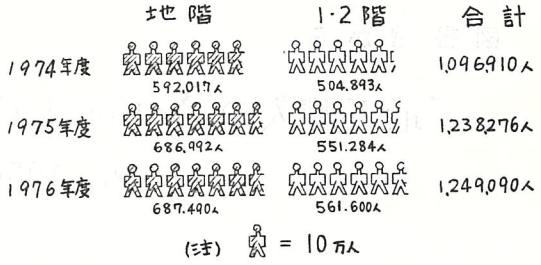
そこで，ここに利用状況等に関する統計的データと併せてそれに関連する実状を述べ，図書館に対する一層のご理解ならびにご援助をいただく資料の一助になれば幸甚であります。

◇入館者数（表１・表２）

入館者数は，地階各閲覧室（新聞コーナー，第１・２読書室，第１閲覧室）及び１・２階各閲覧室（開架閲覧室，雑誌・参考図書室，第２・３閲覧室，ＡＶ各室及び貸出，返却，貸出登録，文献複写受付・引渡等）の利用者数を合計したものである。同一利用者が地階と１・２階を利用することもあるが，その合計を一応入館者数として扱っている。

表１の如く入館者数の漸増は，別表の貸出冊数，雑誌利用数その他の数値にも表われている通り，各種の取扱業務の増加をもたらしている。

〔表１〕入館者数



〔表２〕'76年度 入館者数内訳

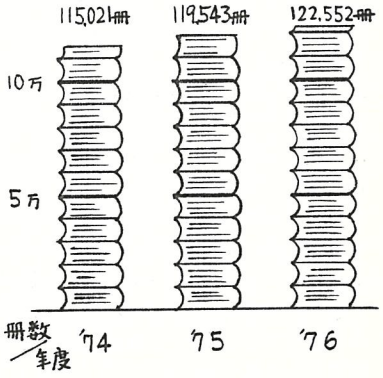
	開室日数	入館者数	1日平均	最多入館者日 '77.1.10
地階各閲覧室	264日	687,490人	2,604.1人	6,549人
1・2階各閲覧室	245日	561,600人	2,292.2人	6,609人
合計	——	1,249,090人	——	13,158人

◇館外貸出冊数（表３）

開架閲覧室と閉架（書庫）図書の館外貸出合計冊数である。１日平均552冊になる。特に'77年１月24日（'76年度最多貸出日）には，1,838冊（開架1,819冊，閉架 19冊）の多くを数えた。さらに，利用数の把握出来ない自由閲覧方式の開架閲覧室，雑誌・参考図書室及び閉架の各図書資料の館内閲覧利用冊数を加えると，図書資料全体の総利用冊数は，貸出冊数の約２倍以上に達すると推測される。

とりわけ，開架閲覧室図書は，約４万5,000冊配架され，蔵書構成の充実（カリキュラムとの関係，利用頻度を勘案しながら年間約6,000冊の新刊書を入れ，新陳代謝を図っている）と利用上の便利さが相俟って利用は甚々多い。

〔表３〕館外貸出冊数



このように利用が多いと必然的に返却・利用済図書の納本（書架へ戻す），配列の乱れ，ラベル及び図書の汚損，破損，切抜，欠本（紛失）等の増加をもたらし，配列規正（乱れを正す），修理補修，複本補充調査等の作業にかなりの時間を要している。１年間に同一図書が13回以上貸し出された冊数は，402冊もあり，これらの図書は，少くとも複本（同一図書２冊以上）又は関連した図書の補充を必要とする。さらに，年間の欠本冊数は，約4～500冊になる。そのために，春期休暇中には，運用上（欠本の補充，カードの引き抜き），財産管理上（除籍）等の面から所蔵点検（欠本調査）を行なっている。

旧館（現啓明館）時代より年々種々の取扱件数が増加しているにも拘らず館員はほとんど増えない現状で，例に挙げた作業だけでも日常消化

することは大きな負担となっている。そこで，館員の負担を少しでも緩和するために，勤務時間外，月末休館日及び比較的利用の少い春・夏期休暇中に滞積している作業を集中的に消化しているのが現状である。また，同時に具体化には到っていないが，電子計算機の利用をはじめとする機械化への検討を進めつつある。

〔表4〕雑誌利用数

年　度	人　　数	冊　　数
'74	4,527	9,019
'75	4,003	7,974
'76	4,662	9,551

（注）雑誌・参考図書室の新刊展示雑誌の利用は除く

〔表5〕文献複写サービス

年　度	件　　数	枚　　数
'74	4,262	41,750
'75	4,230	48,849
'76	4,681	59,046

〔表6〕レファレンス　サービス

年　度	件　数
'74	116
'75	125
'76	100

（注）図書館に寄せられた多くの参考質問（事項調査，文献所在調査，利用指導等＝1日数十件）の中で，カウンター等で係員が助言又は即答したものは含んでいない。従ってこの件数は，その質問内容により調査（時間）を要し後刻回答したもの，及び主に館外からの文書・電話によるもの。

〔表7〕AV室・オーディオ室利用（'76年度）

開室日数	人　　数	1日平均
156	3,508	22.4人

（注）AV室（FMコンサート，レコードコンサート他）と第1～4オーディオ室（テープの貸出・持込等による利用）の合計

〔表8〕その他の利用（各項 '76年度中の利用数）

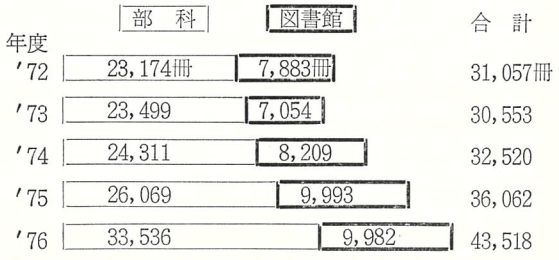
▽教職員・院生の書庫への入庫者数　716人
▽特別閲覧証（券）の発行（学外者＝主として卒業生）
　閲覧証（年度内有効）　132件
　閲覧券（1ケ月有効）　48件
▽他館への利用者紹介状発行　145件
▽他館への文献複写依頼　国内　80件
　国外　6件
▽他館からの図書借受（仲介）　17件

◇図書受入冊数（付表）

ご承知のように図書館では，図書館及び各部科研究室，各研究所で購入，受贈される全学の図書資料を受入，整理している。付表の如く，受入，整理冊数も年々増加し，その受入整理に青息吐息と云った状況である。

業務の改善，時間外勤務等の館内努力によって受入整理業務のスピードアップに力を注いでいるものの，多くの未整理図書資料を滞積しているのが現状である。受入，整理の出来た図書館の新刊書は，新刊展示ケースに展示し，利用を促している。

〔付表〕図書受入冊数　（注）雑誌含む



上記各表以外に，特別貸出（貸出期間の延長，冊数の超過）等，広汎多岐にわたるサービスを実施し，それぞれ多くの利用者があります。

なお，春・夏期休暇中等は，前述のように日常出来ない一斉作業及び館員の勤務時間，健康管理等の面から各閲覧室の開室時間を通常より短縮又は日によって取扱業務を変更して，一部ご不便をおかけいたしておりますが特別の事情のある場合は，ご相談いただきたく存じます。今後も引き続き，利用者の満足を得られるよう努力を重ねたいと思っております。

人名関係調査資料(4)

前号に引続き，日本の各地方の人名を調べる資料の補遺と欧米の資料を紹介します。今までと同様に主要なものだけに限定しました。

日本の地方人名関係調査資料　補遺

茨木県

1. 茨木人名辞書

いばらき新聞社編　崙書房　昭50〔1009〕p.　(整理中)

大正4年刊行の複製版

大正2～4年現在の茨木県人，在住者および茨木県に関係のある人物を広範囲に収録。一部肖像写真入り。配列はいろは順。

栃木県

2. 郷土歴史人物事典　栃木

尾島利雄，柏村祐司編著　第一法規　昭52　194p.(整理中)

昭和51年10月1日現在で，古代から現代にいたる栃木の風土に根ざした人物の略歴，エピソード，人物ゆかりの各種資料を収録。本文は第1部古代～江戸，第2部明治～昭和，第3部郷土の人物100人のように時代順に配列，巻末に風土と人物，人物年表，参考文献，索引(五十音順の人名索引)がついている。

埼玉県

3. 埼玉県人物誌　附北武蔵名跡志

加藤三吾著　歴史図書社　昭51　40，7，321p.(整理中)

本篇の埼玉県人物誌は大正11年岩波書店刊行の複製版。上代から大正までの埼玉県の人物を収録。索引はなく，目次に時代順に人物名を列挙している。又目次のあとに別に人物の地方別一覧のための郡村目次がついている。

群馬県

4. 上野人物志　上中下1巻

岡部福蔵著　群馬県文化事業振興会　昭48　33,7,384，8，398，17，485，28p.(整理中)

大正14年，上毛郷土史研究会刊行の複製版。

上野国(現在の群馬県)の人物で，特色のある事跡を残した人，千余名を収録。上中下巻別の目次に武人，忠烈等の項目の下に人物を列挙している。複製版には巻末にまとめて人物の五十音順の索引を付している。

福井県

5. 越前人物志　上中下2巻

福田源三郎編　思文閣　昭47(整理中)

明治43年刊行の複製版。

およそ1400年前から明治42年までの越前国の人物635名の事蹟並に功労逸話を収録。天皇，皇子，国主，領主を初とし，武臣，武術，武官，政治等の各部門別に分けて配列されている。索引なし。

長野県

6. 長野県人名鑑

信濃毎日新聞社編刊　昭49　17，623p.(整理中)

昭和49年4月1日現在の長野県出身者，在住者および長野県に関係の深い人々で，各界で活躍している著名人を収録。配列は五十音順，巻頭に五十音順の索引がついている。

大阪府

7. 大阪人物誌　正・続編

石田誠太郎著　臨川書店　昭49　2冊(整理中)

昭2～11年石田文庫刊行の複製版。

近世から慶長元和までの大阪並に近郊の池田，伊丹，河内地方の諸名家1200余名の小伝を収録したもの。正続ともに五十音順の人物名の目次がついている。続編は正編に遺漏した者の増補並に伝記に誤のある点を訂正したもの。

山口県

8. 近世防長人名辞典

吉田祥朔著　増補　マツノ書店　昭51　347，8p.(整理中)

昭和35年刊行の複製版。

慶長5年毛利氏の防長移封の際より慶応3年皇政復古の時に至る260余年間に世に出て顕著の事蹟を残した二州(周防，長門)の人物約1800名の小伝を収録。巻頭に五十音順の人名索引がついている。

香川県

9. 讃岐人名辞書

梶原竹軒監修　3版　高松製版印刷所　昭11

55,40，906p.(整理中)

古代から現代までの讃岐の各界名士約2500名の伝記

を収録。冒頭に官職別とイロハ順の目次がついている。

熊本県

10. 肥後人名辞典

角田政治著　青潮社　昭48　20,16,13, 14,272p.（整理中）

昭和11年刊行の複製版。

肥後熊本の人物1513名を収録。巻頭の目次として市郡別索引，五十音順索引がある。

欧　米

11. 外国人の姓名

島村修治著　帝国地方行政学会　昭46　306p.（㊫288.1;G2）

総論，各論，資料からなり，各論で各国別に姓名の沿革，特徴などについて述べている。資料としては，英米人名短編形一覧表，外国人の姓名構成表，旅券の用語および姓名表記の用語と字体を収録。

12. 標準漢訳外国人名地名表　附漢文索引，西文訳音分表

何崧齡，余祥森，夏粋若編　汲古書院　1975

380, 7, 290〔7〕36p（㊫280.3;H）

1924年商務印書館刊行の影印版。

漢訳の外国人名，地名を調らべる資料で，外国語名から漢訳名を知るアルファベット順リストと，漢訳名から外国語名を知る画数による漢文索引からなっている。

13. 漢訳漢名西洋人名字典

仙田正雄，高橋重臣，堀内稔編　天理時報社　1964

100p.（㊫280.3;K）

1957年の準備版を加筆増補したもの。人名の配列は画数順。索引は人名のアルファベット順による漢音索引と表音式仮名遣五十音順の原綴索引からなっている。

14. 岩波西洋人名辞典

1956　1962p.（㊫280.3;I）

約23,000人の略伝，事蹟，主要著書などを簡潔に記録した標準的な外国人名辞典。

15. 新版世界人名辞典　西洋篇

河部利夫，保坂栄一編　東京堂　1971　1050p.（㊫280.3;S-1a）

著名な人物約7000名に厳選し，五十音順に配列。巻末に主要国元首在位表とアルファベット順の人名索引がついている。

イギリス

16. A dictionary of British surnames.

By P. H. Reaney. Routledge & Kegan Paul, 1958. 366p.（㊥988;R 3）

イギリス人名の語源，起源，由来，意味，派生形などの調査資料。

17. Dictionary of national biography.

Ed. by Leslie Stephen & Sidney Lee. Smith Elder, 1908-9. 22v.（㊫283.3-D-1a）

Vol. 1-21; A-Z; vol. 22, lst supplement, additional names, 1901.

—— 2d-7th supplements. Oxford Univ. Press, 1912-71.. 6v.

〔2d suppl.〕: 1909-11 (1912)

〔3d suppl.〕: 1912-21 (1927)

〔4th suppl.〕: 1922-30 (1937)

〔5th suppl.〕: 1931-40 (1949)

〔6th suppl.〕: 1941-50 (1959)

〔7th suppl.〕: 1951-60 (1971)

イギリスおよびその属領の著名な人物の詳細な伝記辞典であり，参考資料や典拠資料を添えている最も権威のある伝記辞典の一つ。

18. Modern English biography: containing many thousand concise memoirs of persons who have died between the years 1851-1900 with an index of the most interesting matter. 〔Ed. by〕 Frederic Boase. Frank Cass & Co,. 1965. 6v.（㊫283.3;M 2）

Vol. 1-3, A-Z; vol. 4-6, supplement.

1851～1900年間の死亡したイギリス人30,000人の小伝を収録。特に19世紀のマイナーな人名については，前記の著名な Dictionary of national biography には含まれていない。

19. Who's who; an annual biographical dictionary with which is incorporated "Men and women of the time." Adam & Charles Black.（㊫283.3;W）

1912, 1918, 1929, 1938, 1952, 1956—

イギリス人を主とした現存者のカレントな人名録として知られているもの。ただし世界各国の著名人も含まれている。

20. Who was who.

Adam & Charles Black.（㊥986;W 4）

Vol. 1 (1897-1915) —

上記の Who's who の姉妹版で，Who's who の被伝者が死亡すると，この Who was who に移される。

21. Who's who in history.

General editor: C.R.N. Routh. Basil Black-

well, 1972-74. 5v. (新283.3;W3)
Vol. 1: British Isles 55 B.C. to 1485.
Vol. 2: England 1485 to 1603.
Vol. 3: England 1603 to 1714.
Vol. 4: England 1714-1789.
Vol. 5: England 1789-1837.
紀元前55年からヴィクトリア朝時代までの英国の人名辞典。配列は没年の年代順。

ドイツ

22. **Neue deutsche Biographie. Bd. 1—**
Hrsg. von der Historischen Kommission bei der Bayerischen Akademie der Wissenschaften. Duncker & Humblot, 1953— (新283.4;W)
ドイツの故人の人名事典として基本的なAllgemeine deutsche Biographie (通称ADB) を基にして編纂されたもので，ADBを現代化した人名辞典。

23. **Wer ist wer?** Das deutsche who's who.
Arani. (新283.4;W)
11. Ausg. ([c1951]), 13. Ausg. ([c1958])—
現在活躍している著名なドイツ人のカレントな人名録。

24. **Who's who in Germany: a** biographical dictionary containing about 100000 biographies of prominent people in and of Germany and 2300 organizations.
Ed. by Horst G. Kliemann & Stephen S. Taylor. Intercontinental Book & Pub. Co., 1956. 1311, 114p. (旧986;I5)
現在活躍している著名なドイツ人の英語版の人名録。

フランス

25. **Dictionnaire de biographie française.**
Vol. 1— Letouzey, 1933— (購入中)
包括的なフランスの大人名辞典で，現在継続刊行中。

26. **Dictionnaire biographique français contemporain.**
2. ed. Pharos, Agence Internat. de Documentation Contemporaine, 1954. 708p. (旧986;A3)
—— Supplements 1-2, 1955-56.
現代フランスの伝記辞典で，外国にいるフランス人およびアフリカ諸国でフランス語を話す人も含まれている。

27. **Who's who in France; dictionnaire biographique.**
Jacuques Lafitte. [Biennial] (新283.5;W2)
1961/62 (5. èd.), 1963/64 (6. éd.), 1967/68 (8. éd.)—
現在活躍している著名なフランス人についてのカレントな人名録。

ソビエト

28. **現代ソ連人名辞典**
霞関会編　江南書院　昭32　60, 63, 222, 10p. (旧986;K20)
1957年現在，ソ連邦で活躍中の各界主要人物を収録したもの。配列は人名の五十音順。巻頭に五十音順の和文索引とアルファベット順の露文索引がついている。

29. **Prominent personalities in the USSR;**
a biographic directory containing 6,015 biographies of prominent personalities in the Soviet Union. Comp. by the Institute for the Study of the USSR. The Scarecrow Press, 1968. 792p. (新283.8;P)

30. **Who's who in the USSR.**
Intercontinental Book & Pub. Co. (新283.8;W)
1961/62 (1962)—1965/66 (1966)
現在活躍しているソ連邦の著名人の人名録で，約4,000名を収録。人名と著作が飜字されている。

カナダ

31. **Who's who in Canada**; an illustrated biographical record of men and women of the time. 1973-74—
International Press, [c1973]— [Biennial] (新285.1;W)
現在活躍している著名なカナダ人の人名録。配列がアルファベット順になっていないが，最初にアルファベット順の人名索引がついている。

アメリカ

32. **Dictionary of American biography.**
Published under the auspices of the American Counci of Learned Societies. Charles Scribner's Sons, 1928-36. 20v. (旧986;S22)
著名なアメリカ人の詳細な伝記をまとめたもので，権威のある人名辞典として知られているもの。なお本館には v. 21: Index (1937刊) と Supplement 1-2 (1958刊) が欠けている。

33. **The national cyclopaedia of American biography**: being the history of the United States as illus trated in the lives of the founders, builders, and defenders of the republic, ard of the men and women who are doing the work and moulding the thought of the present time.

Ann Arbor, Michigan, University Microfilms, 1967-75. 57v. (新285.3,N 2)

Vol. 1-56, vol. 57 : index.

最も包括的なアメリカ人の大人名辞典で，功績のあった故人および現存者についての詳細な伝記を収録。

34. **New dictionary of American family names.** By Elsdon C. Smith. Harper & Row [c 1973] 570p. (新288.1;N 2)

1956年刊行の Dictionary of American family names を大巾に改訂増補したもの。アメリカ人名の起源や意味を知るのに便利。

35. **Who's who in America**; a biographical dictionary of notable living men and women. Rev. & reissued biennially. A. N. Marquis. (新285.3;W)

Vol. 9 (1916-17), vol. 13 (1924-25), vol. 27 (1952-53)—

Who's who にならった現存する著名なアメリカ人の人名録。

36. **Who was who in America** ; a companion biographical reference work to Who's who in America. Vol. 1—

Marquis Who's who, 1960— (Vol. 1-3: 旧986; M19-2)

Vol. 1: 1897-1942.

Vol. 2: 1943-1950.

Vol. 3: 1951-1960.

Vol. 4: 1961-1968. (購入中)

Vol. 5: 1969-73 (購入中)

Who's who in America の被伝者が死亡すると，まとめてこの Who was who in America に移される。

ラテン・アメリカ

37. **Who's who in Latin America** ; a biographical dictionary of notable living men and women of Latin America. Founded in 1935 by Percy Alvin Martin. Part 1-7, ed. by Ronald Hilton. 3rd ed., rev. & enl. Stanford Univ. Press, 1947-50. 7v. (V.7欠) (旧986;H26)

Part 1 : Mexico.

Part 2 : Central America and Panama.

Part 3 : Colombia, Ecuador and Venezuela.

Part 4 : Bolivia, Chile & Peru.

Part 5 : Argentina, Paraguay, and Uruguay.

Part 6 : Brazil.

Part 7 : Cuba, Dominican Republic, and Haiti.

約8,000人を収録したラテンアメリカ諸国の著名な人の人名録。各国別に編纂しているのがかえって不便。

≪カウンターから≫

ジューク・ボックス

昨年度一年間の館外貸出冊数が約123,000冊ありました。その大部分が開架閲覧室の図書です。開架閲覧室の蔵書冊数が約45,000冊ですから，単純に考えても全図書の1冊1冊が1年に3回は開架閲覧室の書架から取り出されて図書館より外に出張していることになります。シーズンによって違いますが，1日の貸出冊数が平均して500〜600冊，試験期にはこれが2倍3倍とふえます。そして毎朝，出勤した我々館員の前に前日返却された図書が山となって積まれていることになります。図書が返却されるたびに元の位置に戻しに行くといった非能率的なことは出来ないので，次の日の朝に前日の夜9時までの返却分をまとめて書架に納めることにしています。この作業を我々カウンターの係員が10時の開室時間まで行なっているわけです。

開架閲覧室の図書は分類番号順に配列している〝つもり〟ですが，皆さん御覧のように大変乱れています。この部屋では利用者が自分の望む図書を自由，勝手に取り出せるように完全開架方式を採用していますのである程度の配列の乱れは仕方がありません。しかし，図書が所定の位置に並んでいないと目的のものがさがせないということになります。我々館員もこの乱れを直すように日頃努力していますが，これは実際に図書を手に取られる利用者の皆さんの御協力がなければ成果が上りません。しかし残念ながらよく守られていないのが現状です。

このような中で我々は毎朝の作業を行なっているのですが，帰る所が無くなってしまった図書を持ってウロウロしたりでとても時間がかかります。書架がジュークボックスみたいになっていればと思ったりもします。

開館は9時からなのにメイン・フロアーをオープンするのは何故10時からなのだという疑問をお持ちの皆さんも多いと思いますが，以上述べたような返却図書の処理，配列の乱れの規正作業を朝9時から10時の間に設定していることによるものです。この点についても御了解願います。

実例を中心とした
資料のさがしかた　—12—

はじめに

カウンターに寄せられる統計資料に関する質問には，簡単な質問から専門的な質問に至る種々様々な質問が寄せられます。今回は，これらの中から，統計資料をさがす場合に，利用者が心得えておいて欲しいと思われることを中心に質問例を紹介してみました。また，物価の問題については，本シリーズ６の「質問例・３」を参照して下さい。

【質問例１】

最新の日本人の平均余命（生命表）が知りたい。

＜回答＞

昭和50年の簡易生命表が「社会保障年鑑1977年版（新359. 364;Ｓ)」「経済要覧1977年版（新359. 33;Ｋ)」「朝日年鑑1977年版（059, 1;Ａ)」などにみられます。原典資料の厚生省大臣官房統計情報部管理課編「生命表」「簡易生命表」は，本館には所蔵しておりません。

〔解説〕

質問例のように一般的な調査事項は，原典資料がなくても，二次資料（原典資料を再編したもの）が数多く出版されるので，原典資料が所蔵されなくても，代りの資料で解決することがよくあるので注意して下さい。このように原典資料を総合的に集録した年鑑，年報類のうち，主要統計を総合的に集録したもので新しいことを知りたい場合には，次のものが便利です。

① 「日本統計年鑑」総理府統計局編（新351;Ｎ３）日本の国勢全般についてのもっとも包括的かつ基本的な統計書。昭和24年以降年刊。

② 「日本の統計」総理府統計局編（新351;Ｎ４）日本統計年鑑の簡約版。

③ 「民力」朝日新聞社編（新351;Ｍ）主に都道府県別の経済力を中心とした統計。

④ 「日本国勢図会」矢野恒太記念会編（新351;Ｎ５）広範囲の統計を収録し，平易な解説がある。

上記の総合的な統計類の数値が古い場合（例：第26回日本統計年鑑〔昭和51年〕数値は昭和49年まで記載）には，一般的な年鑑（例：朝日年鑑）や他の年報・白書等の最新の資料等も調べてみて下さい。

次に，平均余命（生命表）がどのような統計資料に収録されているかを調べるには，「日本統計総索引国立国会図書館監修　専門図書館協議会編　東洋経済新報社　昭和34年刊」や「日本統計索引　同編集委員会編　日外アソシエーツ　昭和50年刊」を利用して下さい。前者は，分類配列で，後者は，見出し語の50音訓配列になっています。

【質問例２】

明治20年，大正10年前後，昭和15〜16年と現在（昭和50年）における学生数（義務教育を除く，旧制中・高・大学と，新制中・高・大学）の増加の数値。

＜回答＞

概略は，「明治以降本邦主要経済統計　日本銀行統計局　昭和41年（新359. 33;Ｎ４）（昭和15〜16年までの数値）と，「文部省統計要覧　昭和51年版　文部省大臣官房調査統計課（359. 37;Ｍ）を見て下さい。詳細については，「文部省第15年報　明治20年（317. 27;Ｍ）「日本帝国文部省48〜49年報　大正９〜11年（317. 27;Ｍ）」「大日本国文部省67年報　昭和14〜15年（317. 27;M-1a）「学校基本調査報告書　昭和50年度　初等中等教育編，高等教育機関編（359. 37;Ｇ３）を調べて下さい。

〔解説〕

本シリーズ，６でも解説しているように，明治以降から比較的最近までの統計的データーを知る資料としては，回答例の「明治以降本邦主要経済統計」や「日本経済統計集　日本統計研究所編　日本評論社刊　昭和33年（359. 33;Ｎ５)」などが便利です。これらは，長期的な統計数値ですが，その原典資料は，「文部省年報」や「学校基本調査（報告書）」であることが分ります。

また，東洋経済新報社刊の「日本統計総索引」では，5.32学校人口5.322在学者の項には，「昭和31年度学校基本調

査報告書」を掲げています。また，日外アソシエーツ刊の「日本統計索引」では在学者の見出し語の下では国調（国勢基本調査）が挙げられ，学校の見出し語の下に在学・在園者数の内，各項目によって，統年（統計年鑑）文要（文部要覧）国調（国勢基本調査）日統（日本の統計）（民力）学基（学校基本調査報告書）生活（国民生活統計年報）の多くの統計書が挙げられています。これらの索引を利用する場合は，自分の求める数値の見出し語や分類個所（用語）に注意して統計書を調べるようにして下さい。

【質問例３】

戦後の両院選挙における政党得票率が知りたい。

＜回答＞

衆議院議員選挙については，「朝日年鑑　昭和52年版（1977）（59．1；A）に第22回（昭．21．4．10）から，第34回（昭．51．12．5）までのデーターがあり，参議院議員通常選挙については，第１回（昭．22．4．20）から，第７回（昭．40．7．4）までのデーターが，「資料戦後20年史１：政治（210．76；S）」に挙げられ，第７回から第10回（昭．49．7．3）までのデーターは，「日本統計年鑑第26回1976年版（351；N３）」に挙げられています。第１回の参議院議員通常選挙は，昭．52．7．10に行われていますので，これは新聞で調べて下さい。

〔解説〕

東洋経済新報社刊の「日本統計索引」の党派別得票数の項を調べますと資料として，自治省の㋑「衆議院議員選挙一覧」㋺「衆議院議員総選挙及び最高裁判所裁判官国民審査結果調」㋩「参議院議員選挙一覧」㋥「参議院議員通常選挙結果調」が挙げられています。しかし，㋑㋩は図書館にて所蔵しておらず，㋺は昭和30年２月執行，昭和33年５月，35年11月の３冊（旧339；Z5-4）のみが図書館に所蔵しており，㋥も昭和31年７月，34年６月，37年７月の３冊（旧339，25-2）だけが図書館の所蔵になっています。つまり，これでは総ての選挙について調べることができません。

次に，日外アソシエーツ刊の「日本統計索引」の衆議院議員選挙・参議院議員選挙の党派別得票数の項を見ますと，統年（日本統計年報）が資料として挙げられています。しかし，「日本の統計1976年版（351；N４）」では，昭和47年衆議院議員選挙と，昭和49年参議院議員通常選挙の党派別得票率のみしか挙げられていません。また「日本統計年鑑第26回1976年版（351；N３）」は，衆議院選挙は昭和38～47年までしか得票数は挙げられていません。従って，すべての選挙の得票数を調べるには，第１回の統計から調べる必要があります。これも質問を解決する一つの方法です。また，この上記の資料には，原典が上述した自治省の「選挙一覧」や「選挙結果調」であることも記されています。

ところで，「日本統計年鑑」を１冊づつ調べるのもよいのですが，選挙結果を扱った主題に注目して，これらの数値を収めている資料を調べるのも一つの方法です。そこで，一般的な年鑑類を調べると，解答例のように，「朝日年鑑　昭和52年版1977」に，衆議院議員選挙のみについてではあるが，第22回から最新のものまで一覧できる資料が収められていることがわかります。次に分類に注目して，314；8 選挙制度の分類目録を調べると，自治省の選挙年鑑（314.8；S３）」が第２（1953年～1973年）まで所蔵〔内容：衆議院第25回～33回，参議院第２回～９回〕しており，「日本の選挙　西平重記著　至誠堂　昭和47年（314.8；N-2）の付録として衆議院第22回～32回（昭.44），参議院第１回（昭.22）～９回（昭.46）の資料が収められていることがわかります。

また，歴史―日本―戦後の資料に注目して「210.76：戦後」の分類個所に回答例の「資料戦後20年史：政治」に衆議院第22回（昭．21．4）～第30回（昭．30．11）参議院第１回（昭．22．4．20）～７回（昭．40．7）までの数値が収められていることがわかります。さらに，この原典資料となっている国立国会図書館の「レファレンス文献要目第６集（選挙編）1965年と，第９集（政治編）1967年（028；K）」にも数値が収められています。

最後に，回答例のように衆議院議員選挙第22回～34回までの最新のデーターを記載した資料がない場合は，参議院議員通常選挙第１回（昭．22．4．20）から，最近の第11回（昭．52．7．10）までのデーターを埋める資料が必要になります。この場合，適当な資料がない時は各選挙の施行日を調べて，新聞で調べるのが最も手取り早い方法です。

図書館実習を終えて

本館では，本学図書館司書課程が昭和27年に発足して以来，この課程を履修する学生のため，毎年９月から10月にかけて４日間の実習を行なっている。

年々この課程を履修する学生も増加の傾向にあり，本年度の場合，図書館演習受講学生の約半数におよぶ40名の学生を４週に分け，本館の業務を図書の流れに従って一通りの実習を行っている。

この頁は，その実習生に依頼し，普段，図書館の利用者である学生が本館で短い期間ではあるが，図書館司書の卵として過ごした結果の感想を寄せてもらったものである。

商学研究科　大　矢　佳　之

同志社大学図書館の現在の蔵書冊数は26万3000冊ということである。だが蔵書冊数とは何か，蔵書とは何か。

学生（利用者）は「図書館には本がない」という。もちろん，その意味するところはさまざまである。しかし，それと同時に，他方図書館は「何万冊の書物がある」といわれる。「ある」＝「ない」ということになるのである。

蔵書が単に書庫にあるということと，本来的に「ある」ということは違う。資料がある，また利用者があるというだけでは，そこには図書館自体は「ない」のである。

その資料の利用可能性をつねに拡大させ，その資料が「ある」ということをギリギリの点まで高めるということそのものが，図書館の業務であり，図書館自身が「ある」ということの実証である。

そして，それは具体的には，目録カードの作成であり，レファレンスであり，他館との相互協力等々の業務において，図書館員の意志力として，また能力として現われるのである。

同志社大学図書館での「現場実習」を通して，図書館の各組織部門を横軸とするならば，それらの組織体を縦に貫くものとしてのエネルギーを感じるのである。それがたとえ１枚のラベル貼りという作業であってもそうなのである。

文学部　細　谷　昌　子

私達は９月12日から４日間，図書館実習生として図書館の業務に携わる事が出来ました。庶務課・整理課を前半に，そして閲覧課を後半２日に渡って実習したのですが，その４日間と言うものは，みるみるうちに過ぎてしまいました。入手された図書の流れに沿って，各段階における作業の意味や必要性を説明されながら実習した事は，図書館が組織的に活動しており，業務それぞれが如何なる事でも重要な意味を持つと言う事について，改めて痛感させられました。日頃，閲覧業務の一部は目に触れる事があるにしても，庶務や整理における図書の管理方法は，このような実習の機会でもない限り，目に触れる事も，又直接手がける事もなかったと思う。講義から学ぶ事に対し，実際にやってみた事から得られたものは，管理や閲覧の仕事の重さと共に，その苦労や問題にぶつかる事が出来たことです。レファレンスでは，実際に調査してみて，まだまだ参考資料をうまく利用しきれない未熟さから，系統立てて利用する事の難しさが身にしみました。このようにして，自ら利用者側から館員側の立場に立つ事で，図書館内における生の資料を得られました。そうして改めて利用側に戻った時，この体験と資料を生かして，図書館を利用する事が，まず第一に与えられた課題ではないかと思います。これからの講義にもふるに活用したいものです。最後になりましたが，指導して頂いた館員の方々に，心から感謝致します。

同志社大学図書館の歴史（その13）

—戦後の混乱から改革へ—

館長（総長兼任）大塚節治

1945（昭和20）年8月15日，太平洋戦争はようやく，わが国の敗戦によって終結し，連合国最高司令官の管理下におかれた日本国政府は，全面的な改革を進めることとなる。まず『日本国憲法』が公布され，教育関係法規としては『教育基本法』・『学校教育法』が公布され，現行の教育制度，すなわち 6. 3. 3. 制が1947（昭和22）年以降順次実施されるようになる。わが同志社に於いても1946（昭和21）年，早くも大学の態勢を整えつつあったが，1947（昭和22）年，牧野虎次総長にかわって第12代総長として再び湯浅八郎（第10代総長：1935—1937）を迎えて新学制への変革を発足させることとなったのである。

しかし戦後の混乱のなかで，しかも猛烈なインフレーションと物資の欠乏，特に食糧事情の劣悪な状態は言語に絶するものがあり，学生・教職員の日常生活も困難を極めたが，このような時期に教職員および施設・設備の充実を伴なう学制の改革を遂行するには多大の困難が伴なったことは容易に想像しうるであらう。

そして，その改革は中学校の改組にはじまり大学および旧制専門学校の新制大学への移行へと順次進められた。この戦後，わが国の教育制度の改革のなかで，学校教育に於いても，社会教育の面に於いても，今までよりも重要なものとして位置づけられ，その整備充実が緊要のものとされたものの一つは図書館であった。新制大学における単位制度も，元来は講義の場合は1時間の講義に対して教室外，主として図書館などにおける2時間の準備のための学修を前提としているのである。

このように多事多難な時期ではあったが図書館長を兼任した湯浅総長は図書館の充実や合理化という観点から全学園に於ける図書行政を図書館を中心に一元化する方針を建て，大学から女子大学・高校・中学まで全同志社の図書の受入，整理の全般にわたる図書の管理を一元化し，管理の適正化，利用の公正化を図って『同志社図書管理規定』を制定し，合せて『図書購入手続方法』なる通達を発し，これを1949（昭和24）年8月1日から実施することとした。これは，いわゆる〝中央図書館制〟ともいうべきもので図書の受入登録を一本化し，全学園の総合目録の編成を目ざして，図書利用の態勢を整備充実しようとしたものであった。この制度は1953（昭和28）年頃まで続けられたが，中学・高校は『学校図書館法』の施行を契機として独立した図書室の整備を計ることとなり，大学・女子大学に於いても個有の大学図書館を設置することが企図されるようになった。このために，これまで全学園の図書館でもあった本館は名実ともに同志社大学図書館へと改組される機運となったのである。

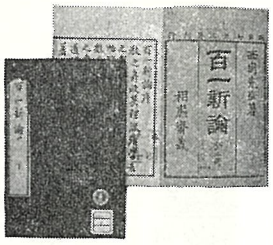
この敗戦直後は図書出版量も少なく，また図書購入費も僅少であったので新しく受入られるものは少なかったが，戦争末期から累積していた未整理図書・再整理図書に加えて，新らしい制度によって増加したものと旧制諸学校の不用図書が移管されるものが多く，その整理に追われた。そのため戦時中極度に減少していた職員数も増員されて短時日の間に倍増することとなった。一方，学生生徒の利用も当初は2階大閲覧室のみで，しかも周辺に現在は岩倉の高校に保管されている動物の貴重な標本が多数置かれていたので，実質座席数は80席程度であったが満席になることは殆んどなかったのである。

湯浅総長は1950（昭和25）年6月辞任，大塚節治神学部教授が総長事務取扱として館長を兼任し，翌年8月に第13代総長に選任され，そののちは館長兼任を辞し松吉貞夫経済学部教授を館長に任命した。

ピックアップ

西　周著　"百一新論"について

西周（にしあまね）は文政12年（1829）2月津和野に生れ，父時義は亀井藩の医者で彼は長子であった。幼年時代祖父時雍より漢学を学び，12才の時藩養養老館に入った。20才の時藩主の命によって儒学を修業することになった。嘉永6年米国ペルリー来航のとき25才であった西周は藩主の命令により江戸の事情をさぐるため藩士数名と共に江戸に派遣された。

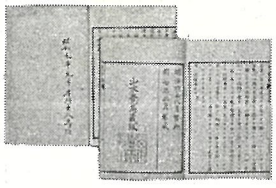


江戸藩邸内で医者野村春岱についてオランダ文典を読み，初めて西洋の学問にふれた。この時を境いに，彼は西洋の学問を学ぶことを決心した。そして蘭学修業のため安政元年3月（1854）26才の時，亀井藩を脱藩した。オランダ語を同郷人池田多仲に学び，杉田塾及び手塚律蔵の塾に通学し蘭学を学んだ。安政4年（1858）5月29才のとき推せんされて幕府藩書調所手伝並に任ぜられた。彼がオランダ書を読み始めて，6年目であった。同時に採用になった人に後の津田真道がいた。西と津田は肝胆相照す程の仲の良い友人となった。

文久2年（1862）34才のとき幕府の命令でオランダに留学することになった。文久3年5月オランダのライデンに到着し，ライデン大学教授のフイセリング博士の講義をうけることになった。慶応元年（1865）10月業を卒え，同年12月28日横浜に帰着した。

帰国後は幕府開成所教授になったが，慶応2年（1866）9月25日京都にゆき，上洛中の将軍慶喜の相談役を命ぜられた。

京都では四条通大宮西入北側の更雀寺（きようじやく寺）に滞在し，慶応3年(1867)2月，更雀寺に私塾を開き，西洋事情と西洋の学問を講義した。塾生には会津，桑名，福井等の藩士数百人がいた。彼等は時勢の流れを知って新しい西洋の学問を求めた。慶応3年（1867）将軍慶喜が大政を奉還して大阪に退居したので彼も12月12日大阪に移った。江戸に帰って後明治元年（1868）10月徳川家の沼津兵学校の頭取になったが2年後明治新政府の役人となり兵部省，文部省，宮内省等で制度の調査，翻訳等を行って，彼の学問的研究も同時に行うことが出来るようになった。又明治7年明六社の同人となり，明六雑誌にしばしば論文を発表した。明治30年1月69才で死去した。



西周は京都の更雀寺で塾を開いていた時の講義の草稿を山本覚馬（会津藩士，後に新島襄，デービスと共に同社社英学校を創立する）に残して将軍慶喜と共に江戸に去った。山本覚馬は明治6年所用のため盲目の身でありながら東京に上京した。その際西周に会って"百一新論"の出版について許可を得て，翌明治7年3月に山本覚馬蔵版として上下2冊の和本"百一新論"を出版した。山本覚馬が西周から草稿を預り出版人となった理由としては次の事情が考えられるであろう。山本覚馬は勝海舟の紹介で西周を知り，京都に滞在中の西周の塾にしばしば出入して西周から新しい西洋の知識を得た。又塾生の退塾問題が起った時，山本覚馬の仲介によって事件の解決を見たこともあった。このように西周は山本覚馬を尊敬していたからこそ，草稿を託し，出版にも許可を与えたのであろう。

"百一新論"は西周がオランダで学んだ西洋哲学にもとづいて百教一致を説き，「宗教と法律との差違，法律，道徳，礼学との差異を論じ，治国平天下の道は修身，斉家の如き方法のみでは不可能であって，法律によるべきであることを極論，宗教，道徳，法律，礼学に各々の領域のあることを示しつつ，最後に哲学はこれ等の全領域を統括する学であると結論するのである。」（麻生義光編　西周著作集　昭和8年10月　P.370）

この書に於て西周は"心理ニ徴シ天道人道ヲ論明シテ兼テ教ノ方法ヲ立ツルヲヒロソヒー　訳シテ哲学ト名ケ，西洋ニテモ古クヨリ論ノアルコトデゴザル"（下巻35丁.）と述べて日本で初めて哲学という言葉を使用した。即ち"百一新論"は日本で哲学について講義した最初の書物として不朽の名著である。

大学図書館に所蔵の"百一新論"上下2冊（表紙紺色，上巻40丁，下巻35丁.）は山本覚馬の門人丹羽圭介（改訂増補　山本覚馬伝）より昭和9年9月寄贈されたもので出版以後100年を経過しているが美麗なものである。丹羽圭介についてくわしいことは不明である。なを近代日本の黎明時代の舞台となった更雀寺も昭和52年12月には洛北二軒茶屋に移転することになった。史跡が又一つ京都市内から消えさろうとしている。

"びぶりおてか"　同志社大学図書館報　No. 22　1977年10月1日　発行

発　行　同志社大学図書館　京都市上京区今出川通烏丸東入　電話 251－3971

編集責任者　楠見愃伸（図書館庶務課長）　印刷　芳文堂印刷所